2022年度
ドコモ市民活動団体助成事業

病気のある子どもへの
遠隔学習・余暇支援
実施可能な人材育成と
学習支援成果の評価

La famille
～認定NPO法人ラ・ファミリエ～
地域子どものくらし保健室

はじめに

立秋の候、ますます御清祥のこととお慶び申し上げます。平素よりラ・ファミリエへのご協力とご支援をいただき、ありがとうございます。

この度、2022 年度ドコモ市民団体活動助成事業を受託し、「病気のある子どもへの遠隔学習・余暇支援実施可能な人材育成と学習支援活動成果の評価」事業に取り組んでまいりました。

当法人の活動拠点である愛媛県では、令和 2 年度の病気による長期欠席小中学生は 675 名であり、他の都道府県と比して高い状況が続いています。しかし、県内には院内学級のある病院が 4 病院であり、中予地方に 3 病院、南予地方に 1 病院のみ、東予地方にはありません。内訳としては小学生対象が 4 病院、中学生対象は 3 病院、高校生対象はありません。復学の為に自宅で療養中の子どもや復学したものの学習についていけず、不登校になり、保護者と共に当団体に相談に来られる子も少なくありません。

本来であれば、公教育による早急な学習機会の保障が必要ですが、公教育の整備を待ち続けるだけでなく、個別の教育的ニーズに応じた支援を県内で行えるよう、学習指導や病気療養児の心理・生理に関する専門性のあるスタッフや教育支援者を増やす必要があります。

新型コロナウイルス感染拡大により、面会制限や登校自粛等で家族や友人等と会う機会が減少し、孤独感を抱えているお子さんも少なくありません。

よって、ICT を活用して学習・余暇支援ができる学習支援ボランティアの研修に力を入れることとなりました。

これらの活動は、多くのボランティアの方々をはじめ、多くの職種の方々に支えられて実現することができています。この場をお借りして心より御礼申し上げます。

子どもたちの明日がより良いものになるように、スタッフ一同、真摯に取り組んで参る所存ですので、これからも、ご指導・ご鞭撻・ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

令和５年８月吉日

認定 NPO 法人ラ・ファミリエ

理事長　檜垣　高史

目次

はじめに …… 1
目次 …… 2

第１章　ラ・ファミリエの学習支援体制について

1-1 学習支援の実施体制図 …… 3

第２章　2022 年度事業の学習支援ボランティア研修会について

2-1 学習支援ボランティア研修会の概要 …… 4
2-2 各回の研修内容と受講生のことば …… 5
2-3 研修前後の自己評価 ……11
2-4 事業の成果報告会について ……15

第３章　学習支援ボランティアの実施

3-1 ボランティアによる学習支援について ……16
3-2 学習支援開始の流れ……17
3-3 事例紹介……18

第４章　学習支援の成果評価アンケート

学習支援を受けた子どもたちと保護者さんの声 ……20

編集後記

おわりに ……27

第１章　ラ・ファミリエの学習支援体制について

1-1 学習支援の実施体制図

- ラ・ファミリエでは愛媛県と松山市から委託を受けている「小児慢性特定疾病児童等自立支援事業」の一環として、学習支援を実施しています。

第 2 章 2022 年度学習支援ボランティア研修会について

2-1 学習支援ボランティア研修会の概要

- 全 5~6 回の研修で構成し、各回終了後、受講生にレポート課題を提出してもらうことで修了としました。第 3 回までの研修が修了し、スタッフとの個人面談ができた受講生は、学習支援ボランティアに参加しました。
- 研修会修了前後でルーブリック評価を実施し、はじめの自己評価や研修終了後の到達目標を考えました。
- 事業期間内である 2022 年 9 月～2023 年 8 月に、医学部や教育学部、福祉系専攻の大学生や医療系の専門学校生、社会人など合計 47 名が受講しました。

回	講義テーマ
第 1 回	「病気療養児の学習支援」 「感染制御の基本」 「小児がんについて」
第 2 回	「病児を取り巻く支援」 「学習支援の実際の流れ」 「ICT を用いた学習支援」
第 3 回	「病気の子どもの発達課題を考える」 「子どもの余暇について」
第 4 回	公開講座「病気の子どもの権利 ～子どもの姿と子どもの権利～」
第 5 回	「成果報告会」

▲ 研修のカリキュラム例

▲ 研修会のチラシ

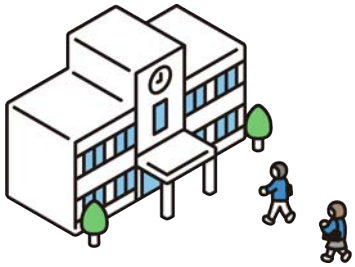
2-2 各回の研修内容と受講生のことば

- 以下、研修会について内容と受講生のことばを紹介します。

第 1 回研修会

（講義内容）

- 「病気療養児の学習支援」愛媛大学大学院教育学研究科　教授　樫木暢子先生
- 「病気の子どもの配慮について」「感染制御の基本」「小児がんについて」
  小児科医　大藤佳子先生



（講義方法）

- 動画配信によるオンライン講座

（受講生のことば）レポートより一部抜粋

- 「少子化が進んで子どもの数が減っているのに対して、病気や障害が原因で長期的に欠席をしている子どもたちが増えていることを初めて知りました」
- 「私の知らなかったところで、自分の好きなことができなかったり学校に行きたくてもいけなかったりする子どもたちが意外にも多いことを学ぶことができました」
- 「病気の子どもたちは医療に焦点が当てられて、教育が守られていないかもしれないという話にハッとさせられました。病気を治すことも大切　だけど、その間も子どもたちの人生は進んでいて、大切な時間であることを感じました」
- 「今回の講義を聞くまでは、子どもたちの病気などについてほとんど知識がなく、小児の患者さんはずっと病床で生活をしていかなければならないものだと勝手に思っていました。動画で紹介された方のように、病気と共に自分なりに生きている方がいることを知りました」
- 「実際に学習支援ボランティアをするときは、担当するお子さんの病気のことはできる限り学んで理解をして、知識として蓄積していけたらと思います」

第２回研修会

（講義内容）

- 「病児を取り巻く支援」認定 NPO 法人ラ・ファミリエ　理事・自立支援員　西朋子
- 「学習支援の実際の流れ」認定 NPO 法人ラ・ファミリエ　自立支援員　越智彩帆
- 「ICT 機器を用いた学習支援」認定 NPO 法人ラ・ファミリエ　自立支援員　越智彩帆

（講義方法）

- 対面講義

（受講生のことば）レポートより一部抜粋

- 「私はこれまで、病気や障害のある人について考えたことはありましたが、その家族についてはあまり考えたことがありませんでした。今回、きょうだいのことも知り、同じ境遇のお友達ができることや大人が時には一緒に楽しんでくれたり、悩みやたわいもない話をできたりする環境があることは、とてもいいなと思いました」
- 「学習支援の具体的な方法について学ぶことができました。学習意欲を高めるために工夫をされていることを知りました」
- 「学習支援ボランティアが、勉強を教えるだけではなく、他のいろいろな要素も含まれていると感じました」

▲　講義中の写真

第３回研修会

（講義内容）

- 「病気の子どもの発達課題を考える」
- 「子どもの余暇について」
  愛媛大学大学院教育学研究科 教授 樫木暢子先生

（講義方法）

- 対面講義

（受講生のことば）レポートより一部抜粋

- 「今回の研修を受けて、病気の子どもたちの学習支援をしたいと改めて感じました。入院中は大人だけと接することが大人びた考え方をもつ傾向がある一方で、将来のことや周りから取り残されると感じるなどの不安があることを知りました。学習支援ボランティアは勉強だけではなく、生活面においても支えになるボランティアなのだと感じました」
- 「病気や障害には名前がありますが、その子を“〇〇という病気のある〇〇さん”という認識で分かった気になるのではなく、その子自身をみて、関わりの中でその子自身を分かっていくことが重要なのだと思いました」
- 「今は大変かもしれないけど、寄り添いながら、長期的に見て、大人になった自分を想像して、この経験は自分にとって良い経験だったと思ってもらえるような支援をしたいと思いました」

▲ 講義中の写真

第４回研修会

（講義内容）

- 公開講座「病気の子どもの権利 ～子どもの姿と子どもの権利～」
  昭和大学大学院保健医療学研究科　准教授　　副島賢和 先生

（講義方法）

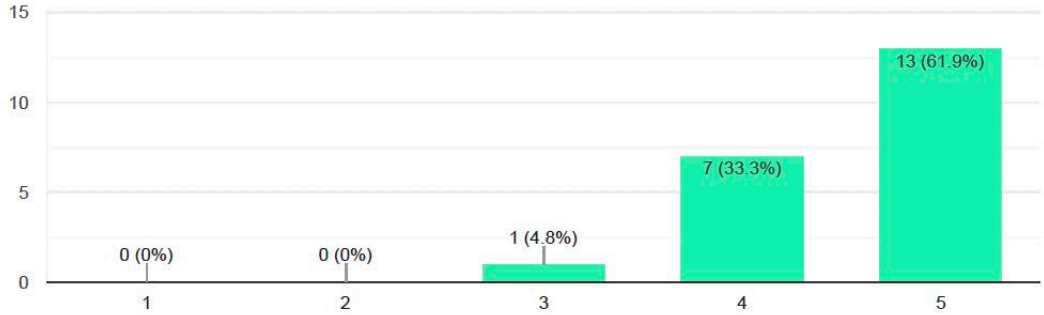
- 対面講義

（講演会後のアンケート結果）

- 満足度について（5 件法）

成果報告会の満足度ついてお聞かせください。

21 件の回答



満足していない　　とても満足している

- 印象に残ったことについて（自由記述）一部抜粋
  - 「活動報告や学生としての取り組み、副島先生のご講演など、幅広い情報や知見を得ることができました」
  - 「副島先生のご講演はじめ、ラ・ファミリエさん、医学部スタッフの先生、Children Supporters の皆さまのご発表を通して、子どもたちへの深い思いに感銘を受けました。愛媛スタイルでの連携支援の具体的なイメージを持つことができ、その可能性を考えることができました。大きな学びをいただきました」
  - 「今をしっかり生きることで将来のことを考えられるようになるという言葉が自分の中で印象に残りました」
  - 「森谷先生の復学支援のお話、副島先生の子どもの権利のお話、フリーディスカッションでの勉強と治療のバランスのお話が印象的でした」
  - 「こどももチームの一員とすること。真ん中に置くのは、困難や課題でありこどもの気持ちを置き去りしないことが大切」

- ご自身の立場から今後やってみようと思ったこと（自由記述）一部抜粋
  - 「地域のボランティアをしているので、子供たちを幅広く、みていきたい」
  - 「地域における社会資源の情報を更新し、情報提供や各機関を繋ぐ、調整する役割ができればと思います」
  - 「医療、教育、地域の支援グループの連携を具体的に模索していきたいです」
  - 「一番できることがあるとすれば募金だと思いました」

第 5 回研修会

（講義内容）

- 「成果報告会」

  講師：愛媛大学大学院教育学研究科 教授 樫木暢子先生

  ファシリテーター：認定 NPO 法人ラ・ファミリエ 西朋子・越智彩帆

  アドバイザー：愛媛大学医学部サークル Children Supporters 部員

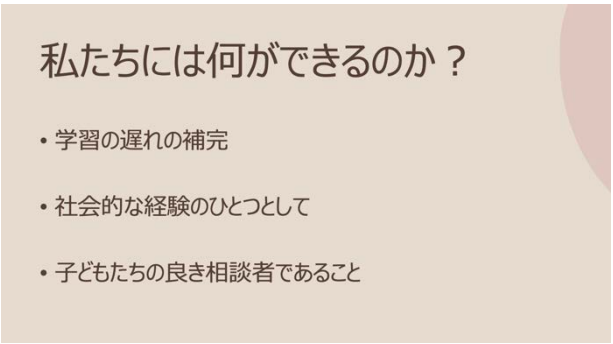
- 受講生による「学習支援ボランティア研修会を通して学んだこと」についての発表と質疑応答・意見交換

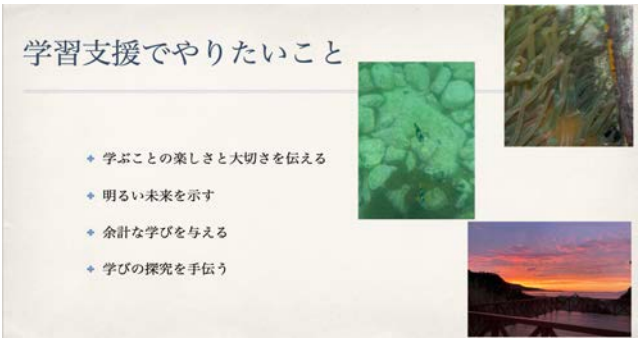
（講義方法）

- 対面講義

グループワーク中の写真

（受講生の成果報告資料）一部抜粋





研修会を通して印象に残っていること

・病弱教育の意義
・勉強すること・遊ぶことで生きていると感じられる
・治療後について
・多くの人が関わっている

など

②学習支援をする際に留意したいこと、やりたいこと

【留意したいこと】
・自分に相手と同じ経験がないことから理解不足となって、
自分の何気ない言動が相手を傷つけるのではないか
どうする？→相手を知る
想像力をもってカバーする

・学習支援をずっと続けられるか、
先を考えすぎて動けなくなってしまう
どうする？→今できることを精一杯やる

2-3 研修前後の自己評価

ルーブリック評価について

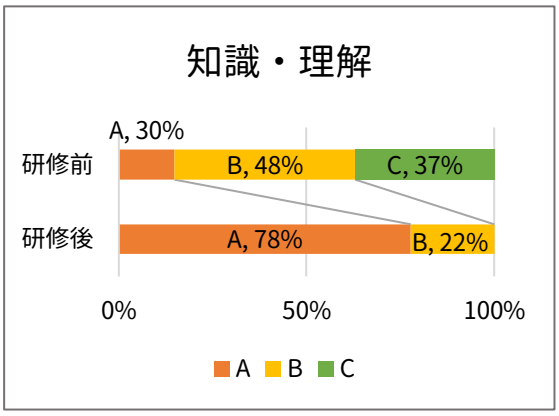
- ルーブリック評価とは、学習の達成度を評価するためのものです。本研修会では、山下ら（2016）[1]が作成した「入院児への余暇・学習支援ルーブリック評価」を使用しました。

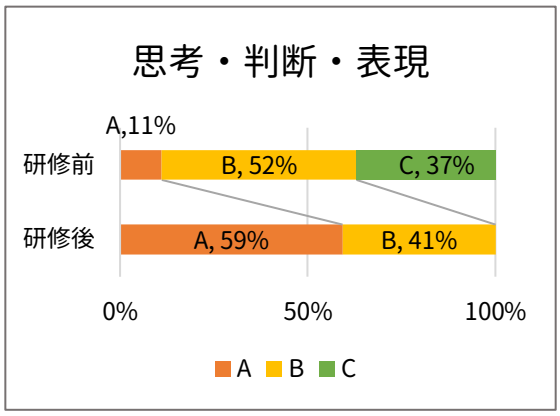
実施方法

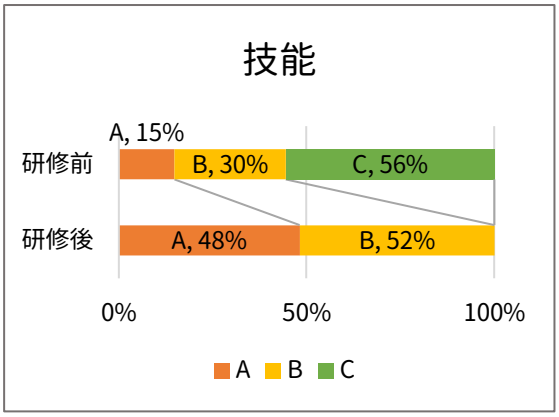
- 研修受講前および受講度にルーブリック評価を実施しました。両方のルーブリック評価が揃っている受講生 9 名のものを集計しました。「知識・理解」「思考・判断・表現」「技能」は各 3 項目で、ＡＢＣの 3 段階評価としました。「関心・意欲・態度」は 10 項目中当てはまるものの項目の数を合計し A＝9～10 項目、B＝6～8 項目、C＝0～5 項目としました。

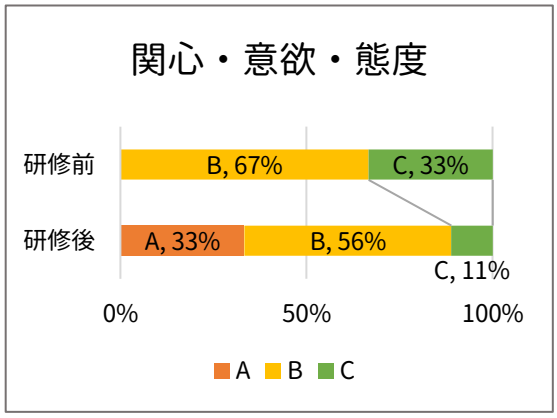
各観点における変化

- 2022 年度事業研修会受講者の回答のうち、研修前後の回答が揃っている 9 名対象





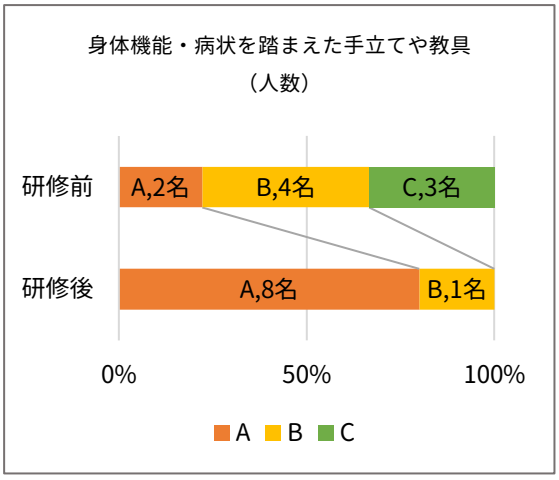


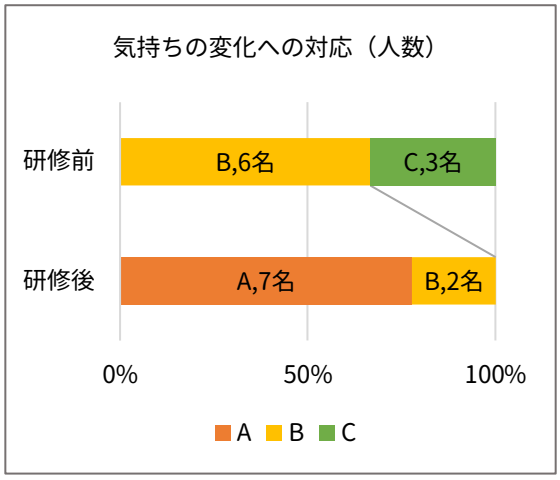


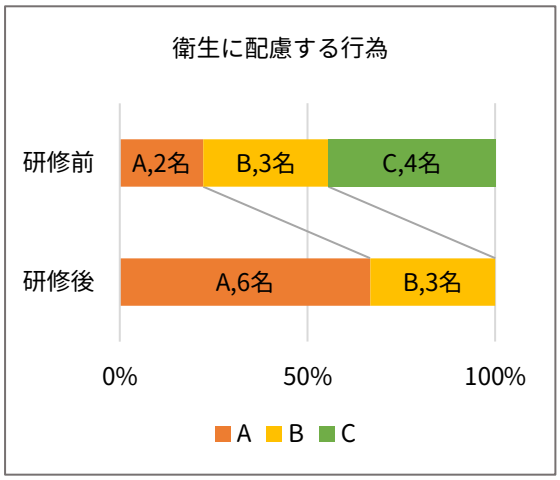
[1] 山下祥代・樫木暢子・太田貴仁・苅田知則・中野広輔，入院児への余暇・学習支援における学生ボランティアへの期待に関する研究，2016,8.30，Jornal of Inclusive Education VOL.1，54-66.

受講生別 細項目における変化

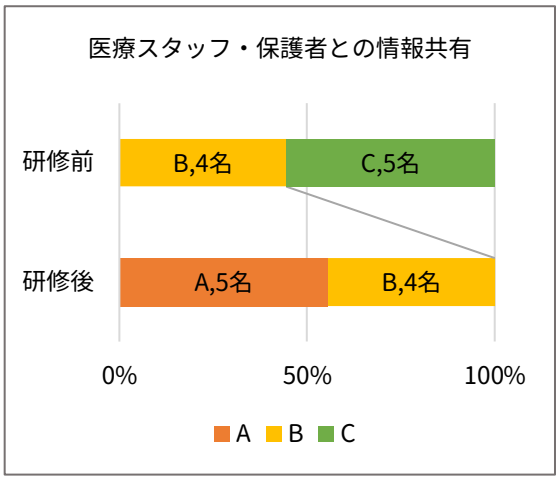
＜知識・理解＞

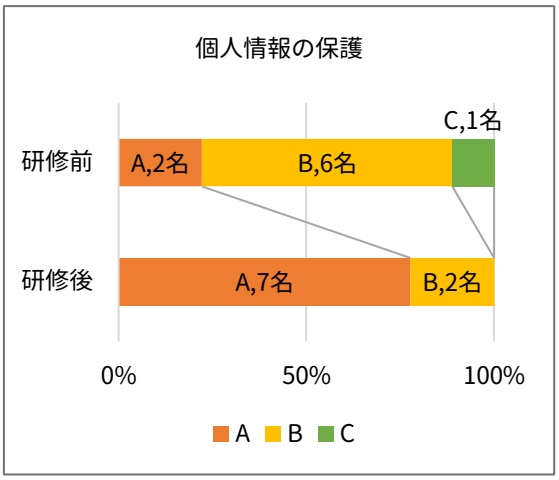


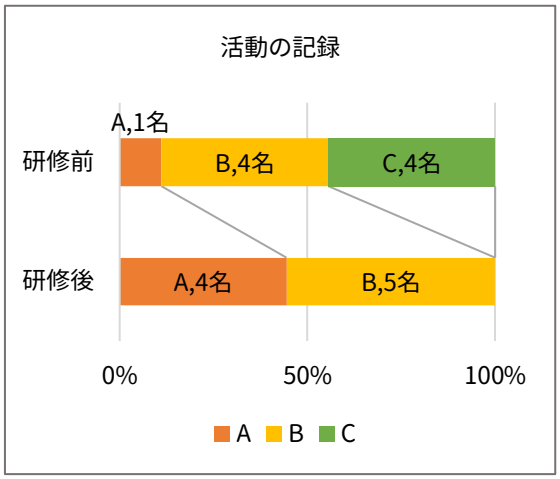




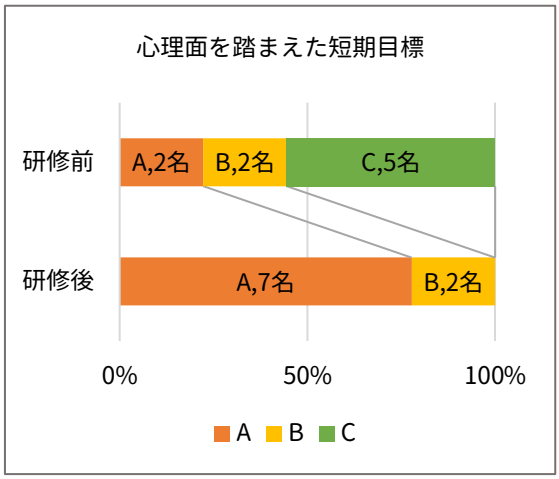
＜思考・判断・表現＞

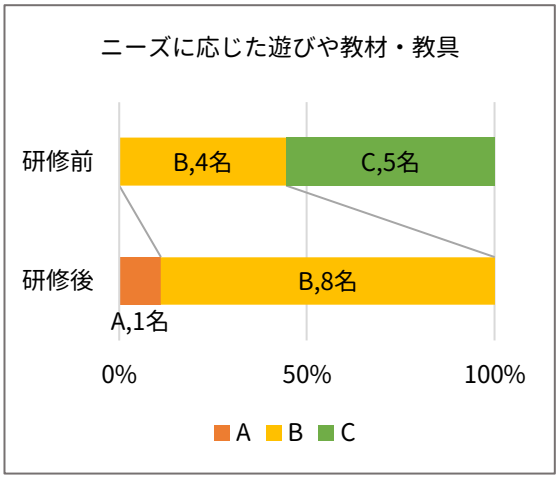


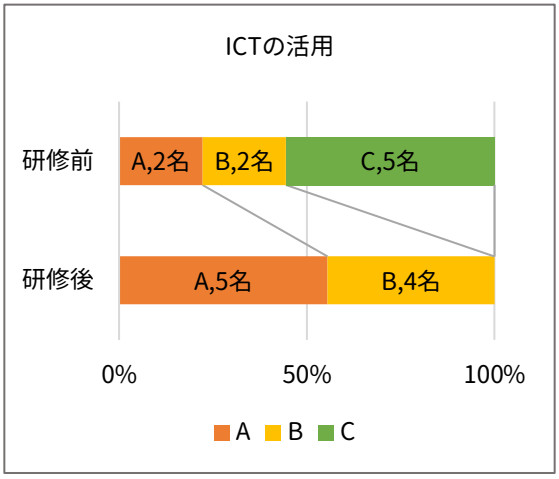



活動の記録
A,1名
研修前
B,4名
C,4名
研修後
A,4名
B,5名
0%
50%
100%
A B C

＜技能＞


心理面を踏まえた短期目標
研修前
A,2名
B,2名
C,5名
研修後
A,7名
B,2名
0%
50%
100%
A B C

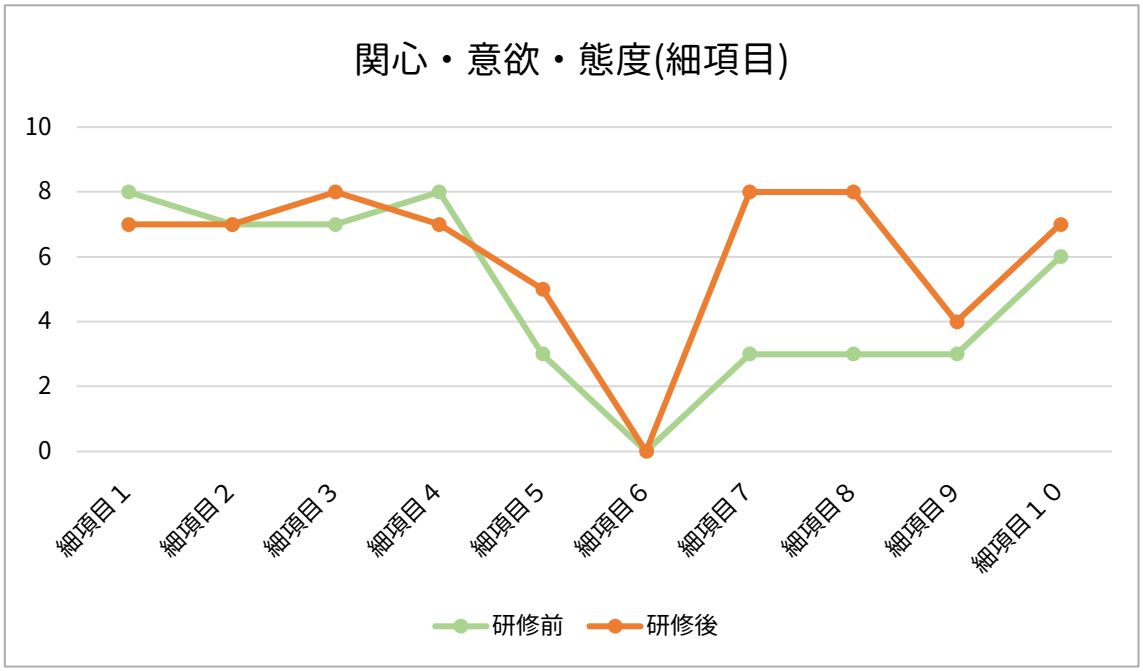

ニーズに応じた遊びや教材・教具
研修前
B,4名
C,5名
研修後
A,1名
B,8名
0%
50%
100%
A B C


ICTの活用
研修前
A,2名
B,2名
C,5名
研修後
A,5名
B,4名
0%
50%
100%
A B C

＜関心・意欲・態度＞

表１　関心・意欲・態度の細項目一覧

細項目 1	言葉や行動の意味を人に聞いて理解
細項目 2	ことばや行動の意味を調べて理解
細項目 3	知識を活動内容と関連付ける
細項目 4	知識を基に関わり方を考えて活動
細項目 5	教育関係者から指導助言を受ける機会に参加
細項目 6	教育関係者に指導助言を依頼
細項目 7	自分なりにまとめて記録
細項目 8	改善点や次回の展開を考えようとする
細項目 9	周囲の人から考え方を取り入れる
細項目 10	ボランティア参加者の考え方を取り入れる



２項目の数値が下がりましたが、全体的に数値に上昇が見られ、研修会を通して、受講生の関心・意欲・態度が向上したといえます。

中でも、自分なりにまとめて記録すること、改善点や次回の展開を考えようとすることについては、学習支援の具体的なイメージが出来上がった、かつ実際に学習支援ボランティアに携わる受講生が増えてきたために数値の上昇がみられたと推察されます。また、周囲の人・ボランティア参加者の考え方を取り入れることも数値の上昇がみられ、より良い方法を学ぼうとする態度が養われたことがわかります。

2-4 事業の成果報告会について

成果報告会の内容

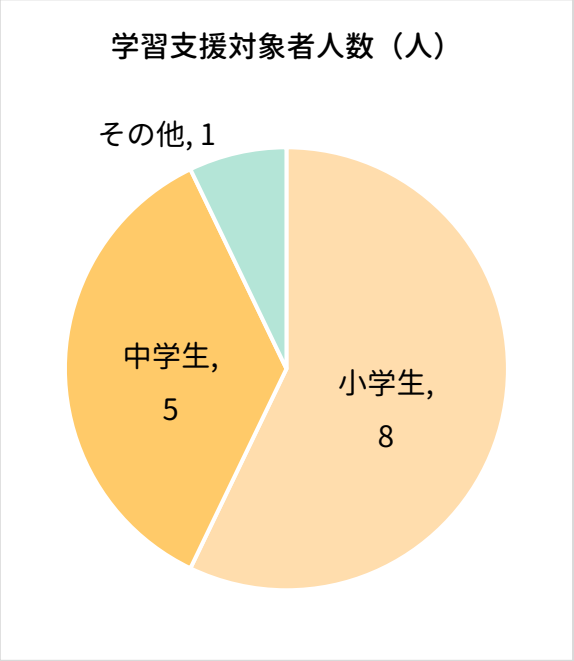
- 日時：2023 年 7 月 15 日(土) 13:00～16:30
- 場所：愛媛大学医学部本館 2 階 基礎第 2 講義室
- プログラム：チラシ参照

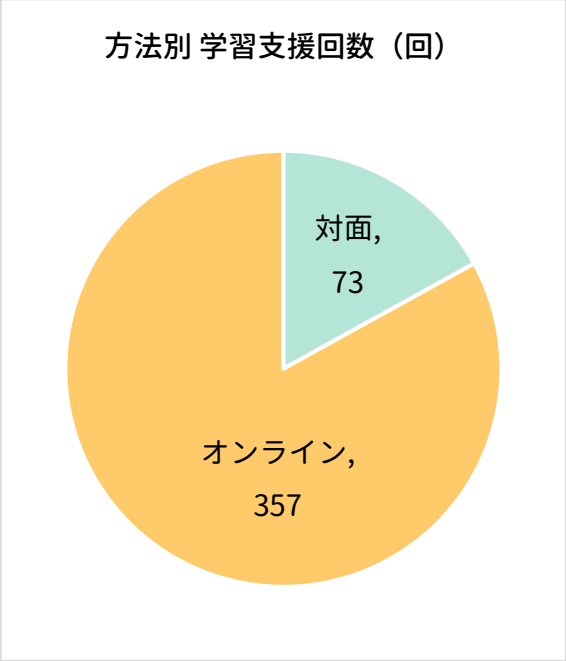
第３章　学習支援ボランティアの実施

3-1 ボランティアによる学習支援について

- 第 3 回までの研修が修了し、スタッフとの個人面談ができた受講生は、学習支援ボランティアに参加しました。
- 学習支援後は、報告書を提出していただき、ラ・ファミリエや保護者等との情報共有をしました。

事業期間 2022 年 9 月～2023 年 8 月までの学習支援ボランティア実施状況



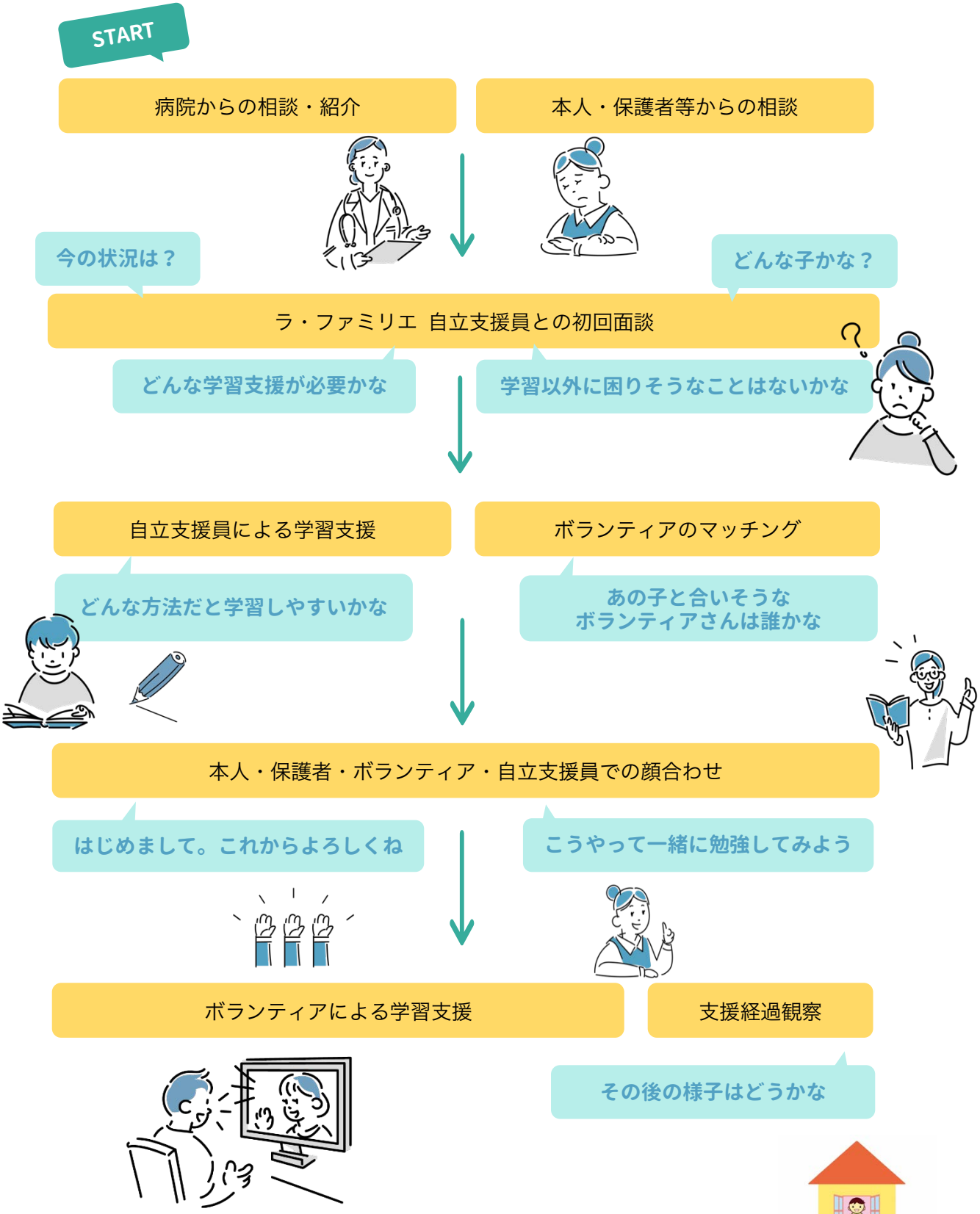


▲　学習支援の様子

● 事業期間中に 14 名の病気のある子どもが、週 1 回～3 回程度の学習支援の中で、学習に主体的に取り組んだり、支援者と雑談や余暇等で過ごしたりしました。

3-2 学習支援開始の流れ

- ラ・ファミリエにおける学習支援ボランティア開始までの流れを図で示しています。



3-3 事例紹介

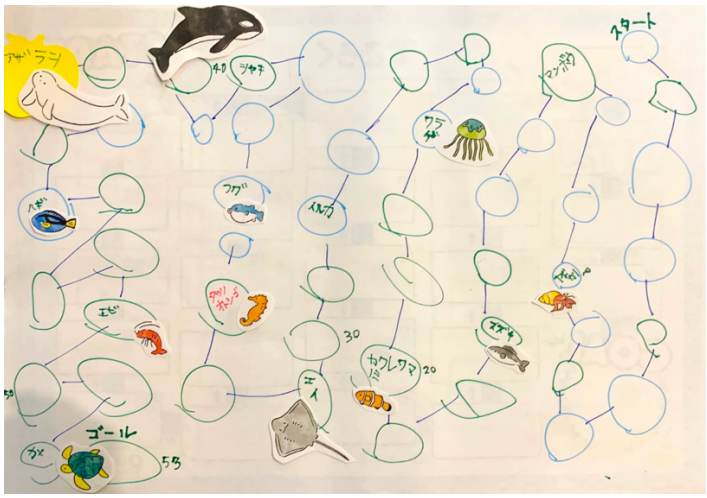
実施した学習支援ボランティアについて、一部紹介します。

生き物とゲームが好きな小学校低学年の A くん

- 病気の治療のため、入院をしています。
- 入院中は院内学級に学籍があり、授業を受けていますが、体調によって登校できない日もあります。
- 本人「ゲームが好き」「楽しいことがしたいな」「お友達が欲しい」
- 保護者「ゲームをして過ごしていることが多いので、勉強も少し取り組めたらなと思っています」「院内学級に、同性のお友達がいないので、息抜きの時間ができたらいいなと思っています」

- 遊びの中で、国語や算数を学習してみよう。
- 同性のボランティアさんと楽しく学べる時間を設けよう。

- ラ・ファミリエ自立支援員と男性の学習支援ボランティア 2 名による対面での学習支援を開始しました。
- 小学校 1 年生の履修範囲について、週 1～2 回程度の学習支援を実施しています。
- 好きなものを使ったり、遊び要素のある学習方法をとったりするようにしています。



◀（例）
海の生き物すごろくを一緒に作って、カタカナの書きを練習しました。
完成後、2 つのサイコロの目を足した数のマスを進むというルールで、足し算を練習しました。

学習支援が、
楽しく学べる時間になるように……

漫画が大好き！中学生の B ちゃん

- 病気の治療ため入院して治療をしていました。
- 退院して、地域の学校に復学することになりましたが、学校の授業についていけるのか、自分はクラスメイトより勉強が遅れているのではないかと不安でした。
- 本人「漫画が大好き」「勉強は嫌い！でも、勉強が遅れているのは不安かも」「もし誰かと勉強するなら、苦手な教科を一緒に考えてほしいな」
- 保護者「学習の不安もあるが、本人の話し相手ができたらと思っています」

趣味の合うボランティアさんと一緒に、勉強したりお話ししたりできるような学習支援をしていこう。

- ラ・ファミリエ自立支援員とボランティア 2 名による、オンラインでの学習支援を開始しました。
- 学校から配布されているワークをベースに、週 2 回程度の学習支援を実施しました。
- ボランティアは、本人と同じく漫画が好きな女性のボランティアさんに担当いただいています。本人が苦手な数学と英語を一緒に勉強しながら、本人の好きな漫画やアニメの話で盛り上がることもあります。

◀（例）
本人がわからない、苦手なワークの範囲について、Zoom の画面共有機能を使って、ペンで書き込みをしていきながら一緒に考えていきます。

一緒に勉強したり 好きなことについて話したりできる相手がいることは、本人の何かの支えになるかもしれません。

第４章　学習支援の成果評価アンケート

学習支援を受けた子どもたちと保護者さんの声

4-1. アンケートの内容

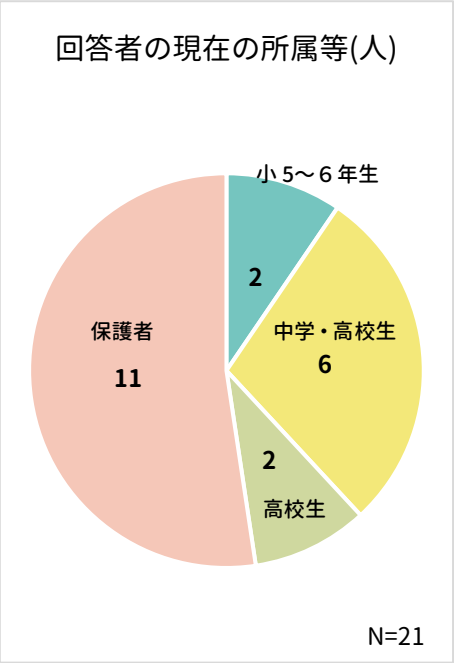
- 病気療養児の健やかな成長発達や入院中・自宅療養中の学習保障を目指して今まで実施してきた学習支援活動の成果と課題を把握し、より適切な支援を検討するために、アンケート調査を実施しました。
- 期間：2023 年 2 月～6 月
- 方法：愛媛県・松山市にて学習支援を受けたもののうち、現在小学校 3 年生以上の患児、及び学習支援を受けた全ての患児の保護者
- 調査内容
  - ◊ 返信用封筒を同封したアンケートを送付し、郵送または Google フォームによる回答にて回収しました。
  - ◊ 調査内容
    - ✧ （ア）学習支援を受けた対象児のプロフィール
    - ✧ （イ）受けた学習支援の内容
    - ✧ （ウ）受けた学習支援の満足度
    - ✧ （エ）学習支援が実施されたことによる対象児の変化
    - ✧ （オ）学習支援について思うこと
  - ◊ 愛媛大学教育学部研究倫理審査の承認を得て、実施しております。

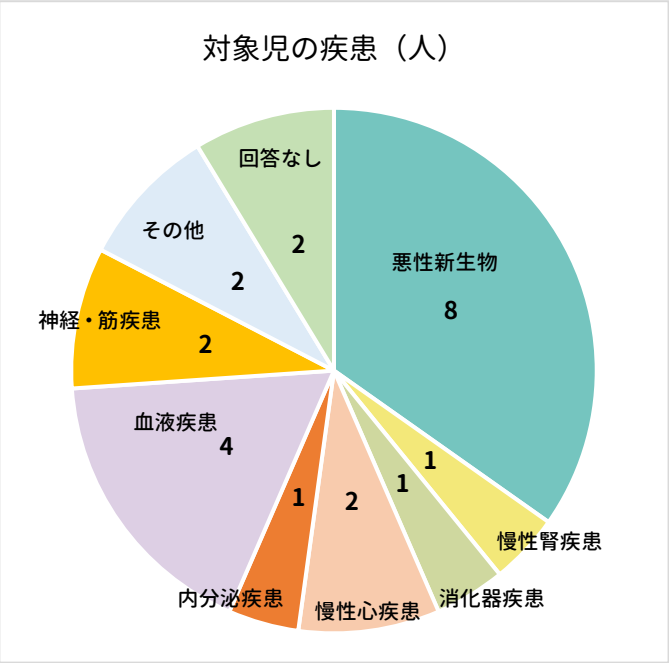
4-2. アンケートの結果

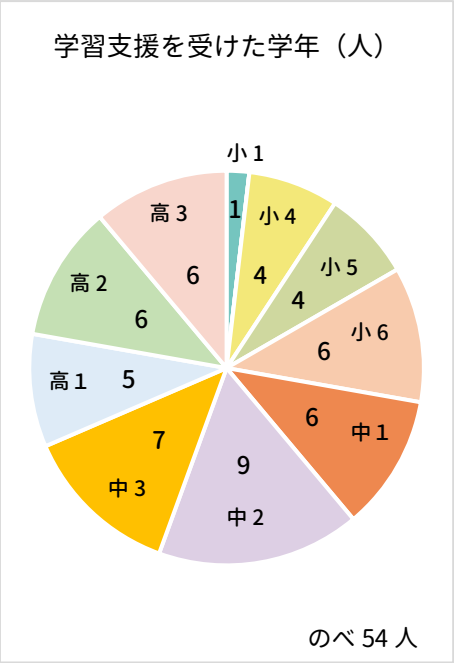
- 患児 10 名、保護者 11 名の合計 21 名の回答が寄せられました。
- 回答結果の詳細は、以下、表やグラフにして掲載します。また、自由記述についてはカテゴリー分類をして掲載します。

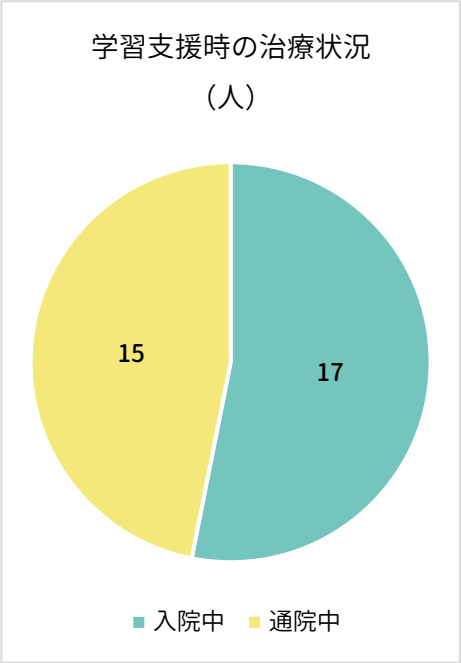
（ア）プロフィール

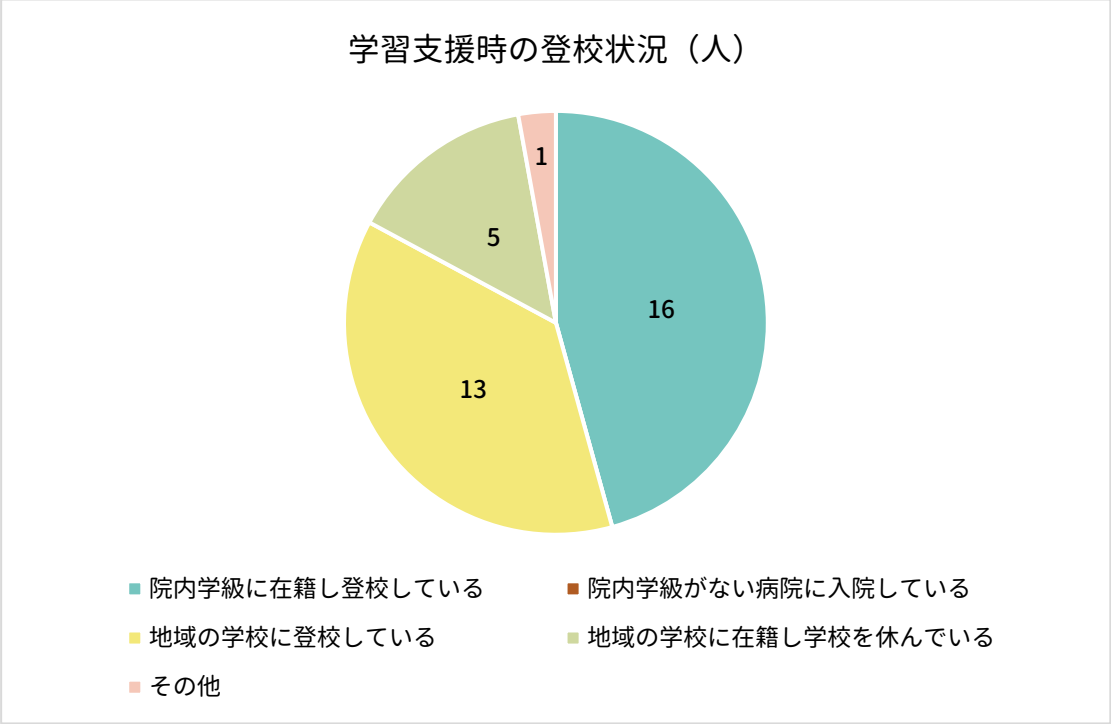
回答者の現在の基本属性等について、お聞きしました。



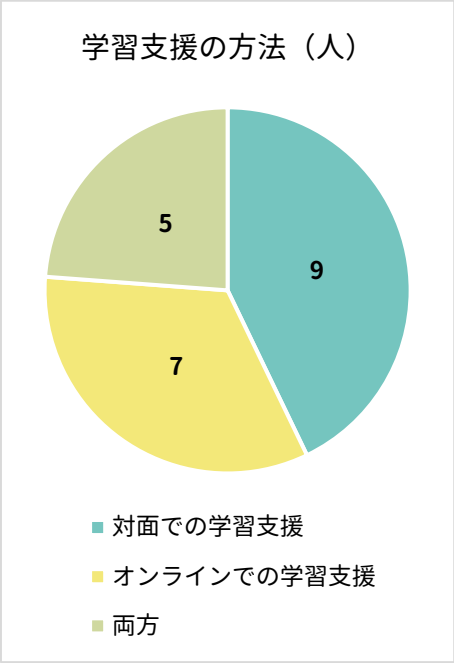


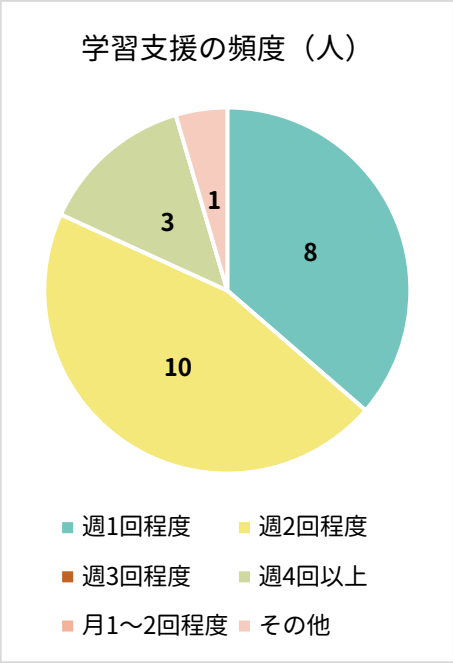


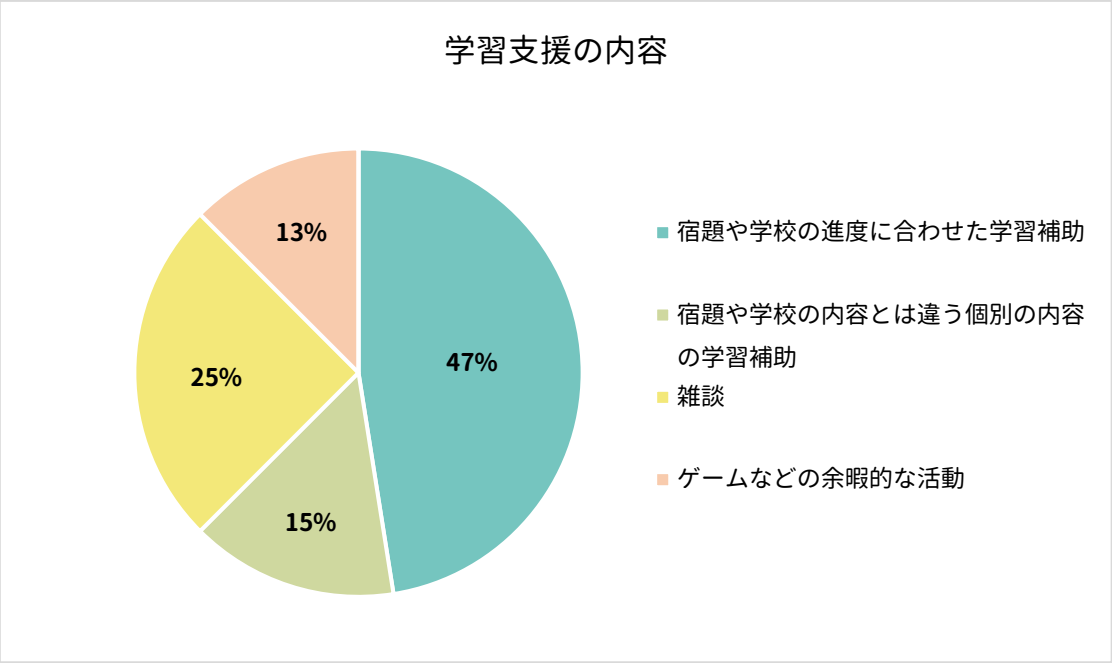




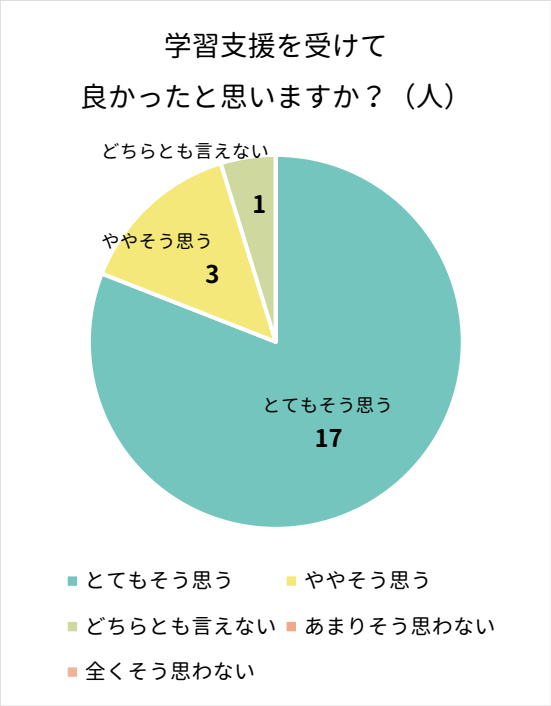
（イ）受けた学習支援の内容

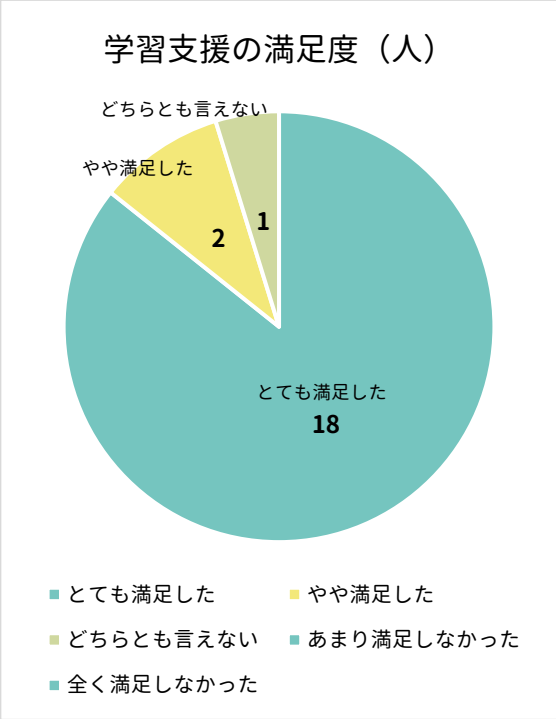




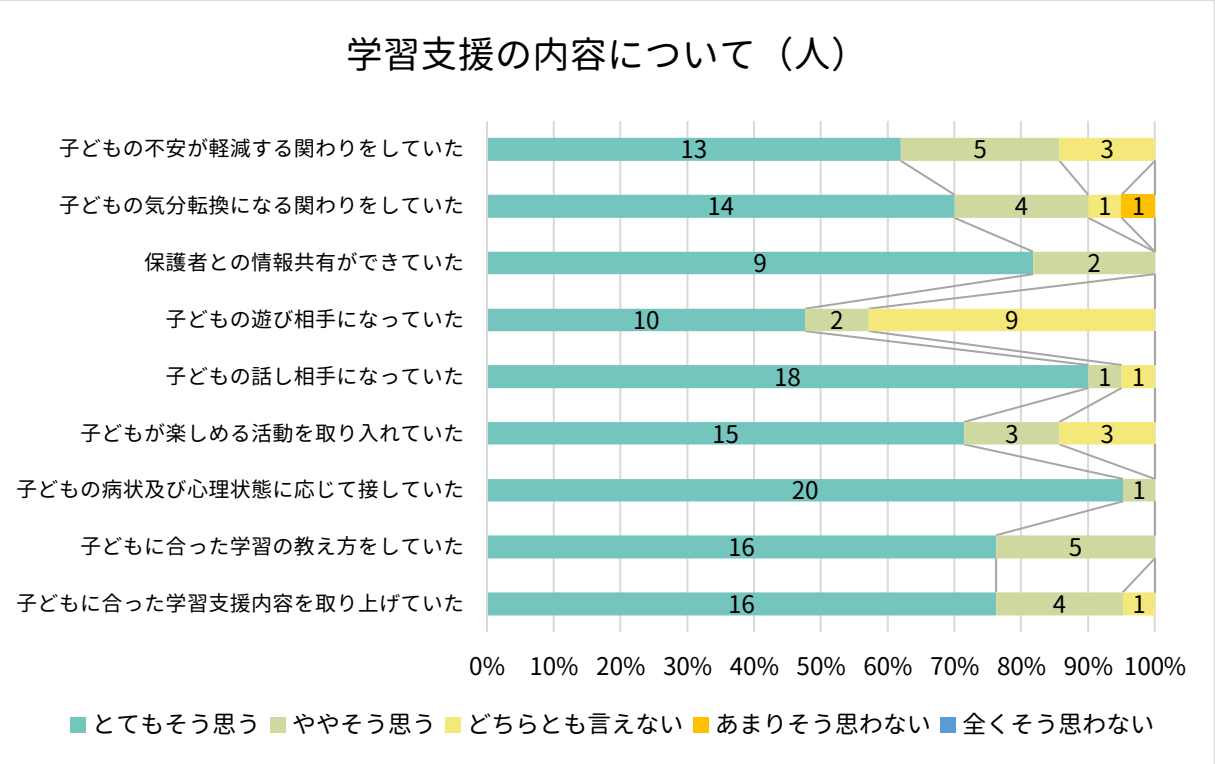


（ウ）受けた学習支援の満足度

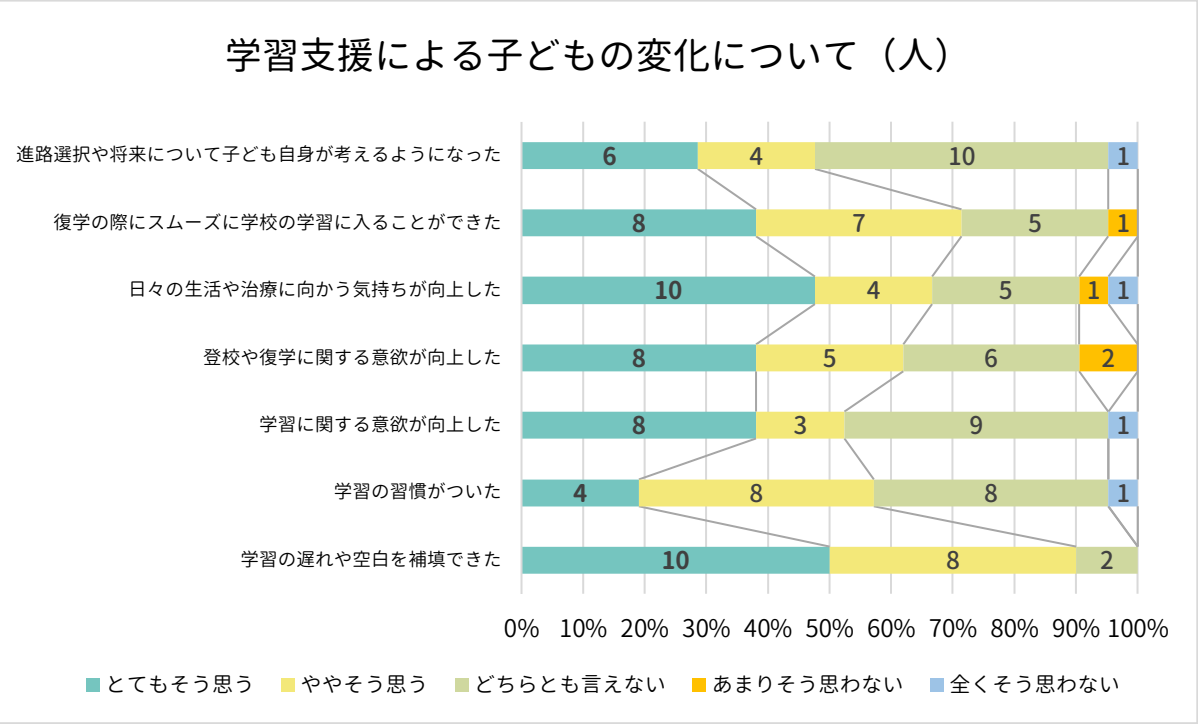




受けた学習支援について、振り返ってお答えください。



（エ）学習支援が実施されたことによる対象児の変化



（オ）学習支援について思うこと（自由記述）

項目	記述内容
学習の補填	• 学習支援により学校の授業に少し遅れるだけで、学校に復帰することができたので助かっています。（高校生） • 長期入院による学習の遅れがとても不安でしたが、学習支援のサポートのおかげで、少しずつ学習の遅れを取り戻すことができました。（保護者） • 3 ヶ月入院していたので遅れも不安でした。転院してからも支援に来てくださり、退院してからも子どもも不安な様子なく復学できました。（保護者） • 学習面でも学校のペースについていけないところを分かりやすく教えていただけたことに感謝しています。（保護者） • どうしても**院内学習だけでは補えない遅れ**をカバーしてもらえたと思います。（保護者） • 学習支援を受けたおかげで高校卒業、進学ができたと思い、すごく感謝しています。（保護者）
学習意欲の維持	• **子どもの学びたいという気持ち**を上手に引き出してくれてよかった。（保護者） • 学習に関する意欲を高めることがとても上手な先生だった。（保護者）
将来を考える	• 最後の方は、進学の相談までしてもらって、とても気分が良い状態で前向きに考えることができた。（高校生） • 息子は支援を受けることで**「将来」のことを考え始め、「自分にできることは何か」を考えるようになりました**。（小学生）
人との関わり	• 実際に会ってではないけど、**コミュニケーション**を取れていいなと思いました。（小学生） • 話をしていて、気軽に話せてとても楽しかったです。（小学生）
気持ちの吐露や整理	• 自分が思っている以上に正直に思ったことを話したりして、**塞ぎ気味な気持ちが軽くなった**。（高校生） • 不安な気持ちや心配ごとなどの相談にのっていただき、精神的にも救われました。（保護者） • 精神的なケア、コミュニケーションを中心に言葉をあまり発さない子どもの気持ちを聞き出し、汲み取り、**笑顔になれる時間**を作ってくださったこと、とても助かりました。（保護者）

	• 自立支援員さんやボランティアの先生と関わること、話し、笑い合うことで「今」の自分と向かい合い、学習と治療に取り組めていると思います。感謝の気持ちでいっぱいです。（保護者） • はじめは本人が嫌がるのではと心配でしたが、うまく話を聞いてくださり、少しずつ気持ちの整理ができたのだと思います。（保護者） • 学校の先生、家族とは違ったところで、本音の部分を聞いてもらえるということが子どもにとって（特に病気でふさぎこんでいたとき）心の拠り所になっていたのだと思います。（保護者）
楽しさ	• 毎回すごく楽しかったし、勉強もできました。（高校生） • 遊びを交えた学習で毎回とても楽しそうに取り組んでいた。（保護者） • 学習支援が楽しみの一つとなり、治療の気分転換になったのはよかった。（保護者） • 楽しく学習していましたし、その時間を心待ちにしていました。（保護者）
その子に合わせた時間	• 学習支援の先生は、みなさん一人ひとりのことを真剣に考えてくださるので、とても感謝しています。（高校生） • 体調や予定に合わせてくださっていたことにもありがたく感じました。（保護者）
学習空白	• 実際の学校の授業とは違っていたので、復学するのは大変だった。（保護者） • 学校の授業についていくレベルにはなりませんでした。（保護者）
学習方法	• タブレットではなく対面だったらもっと良かった。（保護者）

編集後記

本年度は、『病気のある子どもへの遠隔学習・余暇支援実施可能な人材育成と学習支援活動成果の評価』ということで助成をいただきました。今年５月に新型コロナが第５類に移行し、助成をいただいてから初めて、入院中のお子さんたちに直接会って学習支援を行えるようになりました。ただ、学校との連携の周知活動や協力は一進一退で、次から次へと課題が出てきます。ボランティア育成という点で、コロナ禍ではオンラインのツールを使って気軽に本事業の研修を受講いただいていましたが、今年度からは、オンラインだけではなく対面も想定してお子さんたちにも関わっていただく研修をさせていただきました。 オンライン、対面と両方向から子どもたちに関わることで「ひとりじゃないよ」「ラ・ファミリエに相談すればなんとかなるかも」とこの事業を通じて、それを伝える一助となりましたことを感謝しております。

認定 NPO 法人ラ・ファミリエ　理事、地域子どものくらし保健室 ディレクター

西　朋子

新型コロナウイルス感染症が 5 類感染症に移行して、4 年ぶりに病棟の子どもたちに実際に会いにいくことができるようになりました。オンラインでの学習支援は継続して実施していましたが、オンラインは、面会制限や県外への転院など会いに行けない場合の代わりの方法であり、やはり実際に会って顔を合わせて話をしたり同じ空間で時間を過ごしたりすることの大切さを感じています。しかし、コロナ禍で ICT 機器等を使ったノウハウを蓄積したことで、子どもたちに会いに行けない状況になっても、つながることができるようになったことは、とても大きな財産だと感じています。

ドコモ市民活動団体助成事業を 3 年間行ってきたことで、心強いボランティアさんの輪が広がり、病院等のお子さんを取り巻く関係機関との連携体制も強化されてきたことに感謝し、日々子どもたちとの時間を大切に、活動を継続してまいります。

認定 NPO 法人ラ・ファミリエ　地域子どものくらし保健室　自立支援員

越智彩帆

2022年度 ドコモ市民活動団体助成事業
「病気のある子どもへの遠隔学習・余暇支援実施可能な人材育成と学習支援活動成果の評価」
報告書

発行日　2023年8月31日
発行者　認定NPO法人ラ・ファミリエ
企画・制作　認定NPO法人ラ・ファミリエ 地域子どものくらし保健室

問い合わせ先
認定NPO法人ラ・ファミリエ 地域子どものくらし保健室
〒790-0813 愛媛県松山市萱町4丁目7-2 カネ宮ビル1階
TEL/FAX：089-916-6035　E-mail：lafamille@cc-sodan.jp

この報告書は、ドコモ市民活動団体助成事業にて作成いたしました。
多大なご理解、ご協力をありがとうございます。
引き続き、今後もご指導、ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

ラ・ファミリエ
地域子どものくらし保健室